

申候。

一、甲子の春詠める歌(以下皆寫卷昌興の事に係る)

甲子の年立春

東雲のたな引く空のくれなゐに霞みけらしも春や立らん  
冬かけてたちし霞もあらたまの春の光は今朝やそふらん  
慶賀

立返る年の緒ながら祈るかな名もあらたまの千代の初春

早春梅

一枝まづ花咲初めてまどの梅もさかり久しき行末のはる

四月馬乗初の頃

榮え行竹根の鞭をすゝむれば足なみしげきけふのはる駒  
正月八日、丹直清父の喪にこもりて居けるまゝ、春雨  
の徒然をとふらふとて

袖の露は此夕暮の春雨にかばかりこそおきまさるらん

廿八日松の葉ごしに、富士の雪はれたる空に、あざやかに  
みえしまゝ、目を悦しむる餘り、聊いひ出しける也。

のどかなる春の霞にこめつれば色さむからぬ富士の白雪

一、聖廟奉納の和歌五首

二月廿五日聖廟へ法樂和歌五首奉納の此儀、内々田中一閑  
に就て、吉川惟足老人へ歌の旨趣宜候や否を問ふ。

春日侍聖廟寶前詠五首和歌

藤原昌興再頓首

神祇

松立るあけの玉垣神さびぬ幾世をかけしみしめなるらむ

社頭悦

時つ風をさまる御代の春はなほ花の白木綿かけ添てけり

社頭松

榮えますいがきの松のかけに来て千世もと祈る君が行末

社頭梅

さく梅のほひふかめて瑞籬にのどけく渡る庭の春かぜ

梅花久薰

行末は猶久しかれみづがきにはるをわすれず匂ふ梅が枝

一、三月十五夜一天無雲

哀れいかに秋の光もそれながら又いひしらぬ春の夜の月  
月やしる詠がちなる大空のかすみの袖につゝむおもひを

一、雨中三月盡

行春のかたみに今朝やしほるらん霞の袖も雨そゝぎして

一、神田神社獻詠

四月朝神田の神祠へ詣で、短冊に二首の野詠獻之

一すちに祈る心のまことあらばはるかにてらせ敷島の道  
遠からぬ心のうちと思へどもいること難き和歌の道かな

けふ郭公を初て聞く。人にとへば三日四日先より、聲

たてつといへる也。

春かけて鳴ぬといへど時鳥きくなる今朝を初音とぞ思ふ

更衣

かぎりあれば夏の衣にかふれども花の袂の露はのこしつ

雨中の杜鵑

鳴すてゝいづこ行らんほとゝぎすまづ袖ぬらす雨の夕に

一、玉泉寺聖廟奉納和歌

六月廿五日、金澤玉泉寺境内の聖廟へ、和歌三首献上。夏

日侍聖廟寶前詠三首和歌。

源昌興 再拜

社頭夏月

おきまよふ霜と見るまで玉がきに光涼しき夏の夜の月

松下納涼

靜なる此松かけの夕すゝみおもへば夏も心ならずや

祝言

幾千代も猶名にしおへ喜びをくはふる國の民やすくして

一、先塋に詣づ

七月朝野田先塋に詣で、

事しげき世の習ひこそ悲しけれ稀にとふべき苔の下かは  
來てみれば苔むすそとは傾きてあはれ身にしむ秋の初風

一、前田家藏名器の由來

稻葉美濃守殿後關原より被進候唐物孔雀の香爐、後藤程乘獻

上仕候麒麟の香爐、右いづれも名物に候。殊に孔雀は我國

へ二つ渡來の内にて、無比類物に候由。前々より御香爐の

内、此孔雀より勝れたるもの候や、玄蕃・兵部へ可相尋旨被

仰出候處、青磁獅子并赤繪釉の香爐は、東山殿御物の由、

最名物の旨申候。勝劣の儀は如何可有御座やと申上候。御

代々公方家より、御拜領御道具及名物・准名物等、兼て被

仰出記注任り今日指上候。就中大傳太御太刀は、高德公自

太閤御拜領、淺井一文字は台徳公へ淺井備前守殿より傳り